

劇場の顔 緞帳

十選

静岡文化芸術大学教授 永井 聡子

(5)

1966年、東京・三宅坂に開設計で、「現代の校倉造」といわ
場した国立劇場。同劇場を象徴すれるように、奈良・正倉院の「校
る外観は、岩本博行・竹中工務店 倉造」を再解釈したデザインが特



徴的。緞帳は日本美術の様式や主
題を具現化したものが取り入れら
れた。

大劇場の緞織緞帳には格式高
い伝統的な有職文様「萌黄小葵浮
線綾紋二重織」が掲飾されている。
製織はSUMINOE。鮮やかな
明るい萌黄に、植物の葉や花
を圖案化した「葵文」を連続
させて敷き詰めた小葵の地紋
で、花や鳥などの丸い文様の
輪郭が浮かび上がるように抽
象化している。日本の美の粋
を現代の織物技術が再現し
た。

国立劇場開場の同年には、
民間の2代目帝国劇場が新築
開場しており、日本の劇場文
化の歴史は官民双方が大きく
発展させた。帝国劇場は、演
劇やミュージカルの殿堂とな
ることを目的とする一方、国
立劇場は「古典芸能の正しい
保存と新しい芸能の創造発
展」を目的とし、歌舞伎や日
本舞踊、人形浄瑠璃、邦楽な
どの芸術発信の拠点となっ
た。現在、国立劇場は建て替
えのため休館中だが、伝統の
意匠と職人技が新しい劇場の
未来へ受け継がれていくこと
を願う。(2006年、7・
5×24号)

国立劇場「萌黄小葵浮線綾紋二重織」